

人 50 写真に残された空への想い

粕谷 欽二 さん
黒野四区

この九日から十二日まで北部地区公民館で、粕谷さんの写真展が開かれる。航空写真展だという。

「写真ですか。カメラを初めて手にしたのは小学校五年のころから、昭和六年ころです。六楼社（今のコニカ）のボディが木でできたカメラを三円くらいで手に入れたのが最初でした。今まで、いろんなことに手を出してきただけで、一番長く続いたのはカメラですね」

「小さいころから空にはあこがれていましたね、模型飛行機なんかを飛ばしてました。それが高じて、戦中からグライダーを始めたのです」

「親戚中が反対はしたけれど、それまで働いていた工場を飛び出し、帝国飛行協会という軍の援助を受けた半官半民の組織に入って、グライダーに乗りました。今は飛行機なんかの練習でも優秀な指導員といっしょに乗ってマンツーマンで教えてもらえるけれど、昔はね、最初から一人です」

戦争が終わったあとも、当時の仲間たちとグルーブをつくって、グライダーに乗っていた。

「新潟地震のころまでは乗っていたのですが、地震でいたんだ機材を買いかえるのに金がかかり過ぎるということもあったし、仲間も地震の復興ということでも仕事の



写真左上/粕谷さん。右/昭和30年代前半の粕谷さん。当時、所属していたグライダーのクラブのユニホームを着ている。場所は新潟空港。左下/戦中のグライダー練習風景。昭和19年、小千谷で粕谷さんが撮影したもの。ここで粕谷さんは初めてグライダーに乗った。

方をやらなければということもあって、自然解散。そのころからグライダーに乗っていません」

「写真の方は昭和十四年から十六年にかけてが私の最盛期でした。出せば賞が貰えたし。それ以降もずっと続けていますが、死んだら、写真とかネガとかいっばいあるんで、せがれが始末するのに大変かもしれないな」

「戦中に私がグライダーを教えた人が黒埼にも二、三人いるのは驚きました。ここで一生終えるつもりなので、早く地元の人となじみたいですね」

最後に「ほんと、いろんなことに手を出してきて、楽しませてもらったけれど、ただ、金もうけだけが下手だったね」と言って笑った。

ほんの一冊
アルジャーノンに花束を
(早川書房)
ダニエル・キース
アメリカSFの珠玉の一篇です。主人公はチャーリーというIQの低い青年で、彼は、脳外科の手術によって短期間で天才となるのです。チャーリー自身の経過報告という日記体によるこの物語は幸福とは何なのかを問いかけてきます。無知であることが幸福だとはいえないでしょうが、知ること幸福であるかどうか。彼を取りまく人間の醜さや弱さを知った時、それを受けとめるには人間的に未熟であるために生じる様々な摩擦、誰にも理解されない孤独。そしてその行く手に待ちうけている哀しい結末。彼は自分の運命を、彼より先に同じ手術を受けたネズミのアルジャーノンの姿に見るのですが……。

ネビュラ賞、ヒューゴー賞受賞の文学的薫り高い感動作です。(中山佳奈恵)

粕谷 欽二 航空写真展

会場 地区公民館
北 部 区 日 間 9 時 ~ 12 時
6 日 4 時 ~ 午後 5 時
9 時 ~ 無 料 入 場

年 比		前 同 月 比	
4月末日現在	22,945 (+63)	前月比	(+379)
人 男	11,285 (+29)		(+191)
女	11,660 (+34)		(+188)
世 帯	6,055 (+34)		(+137)
4月1日~末日	162	入 転	111
出生	20	出 転	13
死亡	13		9



先月号では「黒埼町の今昔」を掲載してまいりました。ページ数の都合でやむなく体裁としました。期待していた読者の皆さん、関係者の皆さん、どうもすみませんでした。▼斉藤さんや山崎さんの話を読んでいて、当時よかれと思ってやったことが、あとで悲劇的な結末を招いてしまうという運命の皮肉を感じてしまう。運命の皮肉？果たしてそうだろうか。なるべくしてなった、と今からすれば言えるかもしれない。当時の国の宣伝にだまされたと言えは、言えるかもしれない。とにかく、あとで大きな悲劇を招かないようにするのが、斉藤さんや山崎さんらの苦労に報いる私たちの務めだ。

来月号の表紙

来月号の特集をやるので、と号こそ**生涯教育**ははりきっています。学校を卒業したあと何かを学んでいる、打ち込んでいる、考えている、趣味でも仕事でもかまいません。ご連絡をお待ちしています。